

づくつらい思いをしました。

昭和二十三年元旦

前日の夜間作業でぐったり疲れて帰って来て、腹がペコペコだ。朝食を終わって、元旦ぐらいはゆっくり休めると思ったのも束の間、また貨車が入った、全員整列の鐘が鳴る。食延ばしの定量を蓄えたもので、心ばかりのご馳走が出る。民族の習慣の違いもあるだろうが、こんなみじめな正月なんて、と言いかけると「我々は俘虜じゃないか」と境遇を思い出した。

昭和二十三年

一月二十四日、帰国のためナホトカ第三八〇収容所第一分所に入り、その後道路補修作業延べ二百四十キロをしながら収容所を転々とする。

六月十五日、恵山丸に乗船ナホトカ港出帆、六月十八日、舞鶴に入港、無事に復員する。

最後に、抑留中、帰国を夢みつつ万斛の恨みをのんで倒れた同胞に対して、衷心より哀悼の意を表します。

シベリア抑留体験記

岩手県 長塚 力

終戦後、十月初旬の旧北満の都市チチハルは、すでに晩秋の気配色濃く、シベリアおろしが身にしてみる季節になっていました。ここチチハルの関東軍の被服庫より多くの軍服外衣服を取得して、日本に帰ることを信じて貨物列車（二段式）に乗り込みました。間もなく、列車が北進していることに気づき驟然となりましたが、満州及び朝鮮は戦後の政情不安により、ソ連經由にて帰国とのことでした。

久方ぶりに日本（郷里）や食べ物の話題でにぎやかでした。夜になって下車、集落は暗く寂しさを感じ、寒気厳しく、地面は雪で白くなっていました。ソ連への第一歩をここチタ地区のハタプラーク、北緯五十一度、東経百十五度、チタ市より東南約百五十キロの地に印したのです。以来、一九四八年八月に帰国するま

での私は、収容所を四か所渡り歩くことになりました。

ハタブラークより東方約七十キロがソダトイ。ソダトイより北東約三十二キロがカラングイ。次に、ソダトイより北東約三十五キロがブッカッカと、厳冬、飢餓、重労働の二年十か月の収容所暮らしをすることになります。

ハタブラーク収容所。一週間しかいませんが頭より離れません。収容所に着くや、マイナス気温の中で裸にされ入室。衣服一つずつの繰り返し支給に、先行きの不安と、持参した被服等を没収され、結果的に入ソにあたり、運送の使役をさせられたこと等。ダモイ・ダモイの掛け声とともに、ソ連に対する考えを改めねばと感じました。

ソダトイ収容所。十月下旬入所。以前は馬鈴薯の貯蔵庫か体育館のように所内の仕切りはなく、古い施設にて土間でした。私たちを住まわせるために、急ぐぐりの板だけの二段式ベッド。着のみ寝る生活の中で、百五十人ほど収容されていました。マイナス三十度の厳寒の中で、シラミによる発疹チフスの媒介と栄養失

調と合わせて、死亡者の続出をただただ茫然と悲しみの中で見送りました。

作業は伐採と建築作業が主でしたが、粗悪な給与により、体力の衰えにて作業がはかどらず、ソ連の監督にブイストラ・ブイストラと言われたことを厳寒とともに思い出します。

カラングイ収容所。ダモイあきらめムードの中で、二十一年六月、遅い春とともに突然にトラックに乗車。ダモイと言う監視の声に、疑心暗鬼に揺られながら着いてみれば、カラングイ収容所でした。千五百人収容。

私の部隊の戦友も多数おり、演芸会も催され、結構楽しく過ごしておりましたが、夜盲症にかかり苦勞しました。作業は農業と建築土木のようでした。収容所は新しく、抑留者の建築による二階建てでした。十月ごろ、またまたトラックに乗車、行き先不明のまま発車。ダモイ等夢にも見ませんでした。

ブッカッカ収容所。鉾山の部落にて段差の多い坂道で、一つの山といったところでした。収容所は、以前鉾山勤務者の住まいかと存じますが、二十畳くらいの

部屋が十以上あったと思います。三百人ほど収容されていましたが、作業は鉱山作業と伐採作業が主でした。

私は二十二年五月ごろまで伐採し、以降二十三年七月に帰国するまで鉱山作業をしていましたが、給与の改善とともに体力の回復により、若さもあり、作業も苦にならなくなり、常時、ノルマの完遂により一〇〇%を超え、月に二百ルーブルをボーナスとして給付を受け、嗜好品等を買いたくもありました。

一方、二十二年ごろより、日本新聞による民主化の波も急を告げ、軍隊の階級制度の廃止と同時に、抑留者による所長の選挙等。演劇を中心とした文化活動。共産主義の啓蒙等。二十二年の後半より二十三年にかけて激動の時代でした。ハラシヨールポートは外出も許可され、食堂でロシア娘を交えながら軽食をした思い出もあります。

七月、収容所の閉鎖とともに、いよいよ待ちに待ったダモイ。チタ市において帰国団の編成をして、貨物列車（二段式）にて鉄路ナホトカへ。一、二、三の収容所を通過して八月二十日前後出港。三年ぶりに見る

祖国、日本。郷里の方々、家族等、思いはめぐり、期待と不安に興奮がやむところを知りませんでした。

悲惨な抑留者の生活

新潟県 周 佐 喜代止

昭和十八年に高田連隊に入隊して間もなく北支派遣となり、河北省の清豊県、嶋第二九六五部隊で初年兵教育を受け、やがて陣第四二八六部隊真柄隊に編入され、毎日の作戦で移動が続き新城県で左肩を負傷しました。また、河南戦等にも参加しました。それから二十年八月に急に戦況が変わり、万里の長城を越え満州の通遼で終戦となり、奉天で武装解除され北陵大学に集合。その後人員の関係で戦友とも別々の貨車に乗せられ、私たちはウラジオ経由で帰すとたまされ、着いたところは囚人たちの働くブカチャチャの収容所でした。作業は坑内炭坑でした。食糧の悲惨さは一食分が湯吞茶碗一杯の豆、そしてアワ、雑穀の粉等、それも